

完全な愛は恐れを締め出す

ヨハネの手紙一 4:7-21

賈 晶淳

2月24日(木)にウクライナへのロシアの侵攻が始まり、2月27日の証詞では列王記下18章1節-12説を読み、前8世紀のアッシリアの侵略に対応するヒゼキヤ王の話をご一緒に考えました。そして、翌週の3月2日(水)に四旬節が始まりました。ただ、ロシアの侵略行為はその後も続いており、軍はもちろん民間人の犠牲も増えているところです。そのため世界各地でロシアの侵略に対する抗議集会や祈祷会などが開かれています。

本日の私たちの礼拝も世界の祈りに合わせる事ができればと思いました。聖書テキストは選びに少々悩みましたが、これまでの通りにヨハネの手紙一の続きを読むことにしました。幾度か読み返しましたら四旬節にもウクライナ事態にも関連する気がしました。

先ず、本文の見出しは「神は愛」で、続く言葉は「愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。」という呼びかけで始まっています。愛はヨハネの手紙の一貫したテーマであります。関連して証詞の題も18節の言葉を引用し「完全な愛は恐れを締め出す」とつけました。ここで「完全な愛」とは神の愛のことですが、新共同訳聖書でこの言葉は旧・新約すべてを通してここしかない表現です。英訳(NRSV)は perfect love になっています。ギリシア語は teleia agape で、「完全」の他に「成熟した」などの意味で形容詞的に使われています。また17節と18節に一度ずつ出ている「全うする」という言葉がありますが、ギリシア語は完全という言葉の動詞的意味で使われている teleioo です。「完成する」、「成し遂げる」などに訳されますが、英訳も perfected、perfection と訳されています。

ここで「完全」、または「全うする」とはどのような意味で使われているのかを理解する必要があると思います。18節を見てみます。

愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。

この箇所だけに「恐れ」という言葉が4回出ています。「恐れ」のギリシア語は phobos で「不安」という意味もあります。最初の「愛には恐れがない」の後に、それを更に強調しているように「完全な愛は恐れを締め出します」が出ていて、「恐れは罰を伴い」を挟んで最後に、「恐れる者には愛が全うされていないからです」と、3カ所が「愛」と関連して記されています。これらの表現から考えられますのは「恐れ」、或いは「不安」というのが、何らかの理由で元々あったにも関わらず、完全な愛によって締め出せるという話です。

この「恐れ」についてですが、ヨハネの手紙の以前の証詞を思い出して頂きたいです。ヨハネの手紙の内容は当時の教会の中で大きな問題になっていたグノーシス派の考え方に注意を呼び掛けるためのものでした。特に彼らの主張の一つに「仮現論」という考えがありますが、それは神が御子イエス・キリストの姿でこの世に来られたのは本当の人としてではなく、神の霊が人の身体を借りて来られたという主張です。そのためキリスト者の信仰の原点とも言えるイエス・キリストが十字架上の苦しみを受け死に、復活したというのは虚偽であるということです。このような二元論的な考え方が当時のキリスト者を大変混乱させました。そこで前回読みました4章2節に「イエス・キリストが肉となって来られたということを公に言い表す霊は、すべて神から出たものです。このことによって、あなたがたは神の霊が分かります。」と、イエス・キリストが完全な身体を持つ人であったとヨハネの共同体

が信仰告白をしているのです。

理性と身体を持つ人が苦しみと死の前で恐れや不安を覚えるのは当然のことと思います。それが生きている証拠であります。イエスが十字架の事件を前にし、恐れと不安を持つ存在であったことは福音書を通し確認できます(「この杯を…」マルコ 14:36 等)。「完全な愛が恐れを締め出す」というのは人間イエスだからこそ当てはまることでグノーシス主義は通らないものです。ここにヨハネの手紙の主張の意味があるのです。即ち、イエスの愛は「完全な愛」であったということです。

そして、12 節にはその愛をイエス・キリストに従う人々の内で全うされることが記されています。いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内ですべて全うされているのです。

恐れと関連してもう一つのことが考えられます。原始キリスト教共同体の信仰における重要な中身として「差し迫った終末」、即ち、世の終わりが近いという考えがあります。

こうして、愛がわたしたちの内ですべて全うされているので、裁きの日に確信を持つことができます。この世でわたしたちも、イエスのようであるからです。

右の 17 節の真ん中に「裁きの日に確信をもつ」という表現がありますが、この「裁きの日」とは世の終わりのことを言います。差し迫った裁きの日を前にした人々に恐れと不安があったということと、「確信」とは愛が全うされることで、不安と恐れが締め出せる「堅い信頼」のことを意味します。

今度はこれらのことをウクライナ事態と関連させて考えたいと思います。

今回、ロシアのプーチン大統領がウクライナの侵攻を命じた理由は分かりません。クリミア半島を手中に入れ、また今回の行動に出たというのは領土拡張の目的もあるでしょう。

旧約聖書には紀元前 9 世紀頃に北イスラエルのアハブ王が宮殿のそばにあったナボトのブドウ畑が欲しく、売るのを拒むナボトを殺し自分の物にしたという記録があります(列王記上 21 章)。その時のナボトのことを想像してみます。アハブと妻イゼベルによる殺害のプロセスの中で怯えながらも必死に先祖代々の土地を守ろうとしたナボトの姿です。今のウクライナの人々の姿でしょう。

恐れと不安は常時あるものではなく特別な瞬間に感じるものです。命や財産が狙われているウクライナの人々の現在がその瞬間です。恐ろしい戦力を持ち、自分たちの命や財産を破壊しながら奪いに来る者らを前にし、怯えない人はいません。しかし、先祖代々の土地と愛する家族を守ろうとして必死で闘っているウクライナの人々とその勇氣ある行動は愛を持って恐れを締め出している姿です。愛を全うする姿です。

それに反してロシア軍側の多くの若者は命令で動くだけで、初めは訓練の一部だと思い、攻撃が始まると、自分たちが何しにウクライナに来ているのか知らなかったという話を聞きました。守るべきものがなく、大義名分も欠けている中、相手のことを破壊し殺す心境は大変複雑なものと思いますが、そのため戦場における死の恐れで怯えているにも関わらず、彼らにはその恐れを締め出す力が弱いことでしょう。

プーチン大統領もキリスト者であると聞いています。同じ神を信じ、神を恐れる者であれば当然今回の侵略が間違いであることと判断していると思います。多くの若者たち、そして民間人の命が欲望の手段と道具として犠牲になっていることはとても悲しいことです。どうか預言者エリヤを通しアハブ王に語られた神の声、「主はこう言われる。あなたは人を殺したうえに、その人の所有物を自分のものにしようとするのか」(列王記上 21:19)を聞き入れることを祈ります。

(2022 年 3 月 6 日証詞より)